フェースシールド落第

写真は毎日新聞８月６日夕刊。フェースシールドを着用し、全ての大阪市立小中学校への配布を表明する大阪市の松井一郎市長=同市役所で５月。

リードから―新型コロナウイルスの感染防止対策として活用が広がるフェースシールド。大阪市は６月の学校再開に合わせ、市立小中学校に通う約 16 万人の児童・生徒や教員全員にフェースシールドを配り、マスクとの併用を推奨した。感染防止と熱中症対策の両立を目指す学校現場で困惑が広がる中、医療界から熱中症のリスクを指摘する声が上がり、市は限定的な使用にとどめる運用変更を余儀なくされた。

５月頃に、松井市長のフェースシールド発言を読んだことがある。その後どうなったか気になっていたので、この記事に注目した。抜粋して紹介したい。

「小学生は向き合ってしゃべっちゃだめよと言っても、会話してしまう。教員は着用を徹底させたい」。松井一郎市長は５月下旬、学校再開に合わせ授業中に教員や子供たちにフェースシールドを着用させる考えを突然表明した。民間企業からフェースシールドの寄付を受けたのがきっかけの発言だったが、当時は全国に先駆けた対策で注目を集めた。

市は 940 万円の公費も投じ、教員分を含め約 20 万個のフェースシールドを全校に配布した。市教委は感染対策マニュアルで、教員は教室でマスクとの原則併用を明記。児童・生徒には授業中などで距離が保てなかったり、向き合ったりする場合の着用を推奨した。

大阪市では活用の判断は各校に委ねられたが、現場では戸惑いが広がった。今年は夏休み期間が大幅に短縮され、蒸し暑い夏場も授業がある。都島区の小学校は常時着用は熱中症の危険が高まるとして、早々にグループワークなどごく限られた場面にとどめた。浪速区の小学校長は「教員から視界の悪さや転倒の危険性を訴える声もあり、活用していない。配られたものはお蔵入りになる」と打ち明けた。

府内の小児科医約 700 人でつくる大阪小児科医会は６月中旬、フェースシールドについて「血液や飛沫から医療従事者を守るためのもので、他人から『うつされるリスクが高いとき』に使用する」との見解を公表。熱中症や転倒のリスクを強調し、やめるよう訴えた。

記事を読んで、松井市長の「雨がっぱ発言」を思い出した。市役所１階ホールに山積みにされた雨がっぱを整理する市職員。最近では、吉村知事の「イソジン」発言に抗議の声が上がる。どうも維新二人の首長は、新型コロナでも混乱を招く発言が多いようだ。

（2020年８月９日）